



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 金子 敬
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

佐々木さんを支援する会 新代表

(大井バプテスト教会牧師)

加藤 誠

かとう まこと

「希望はその『行間』にある」

「佐々木和之さんを支援する会」の発足以来、11年間にわたって世話人会の働きを担ってこられた金子敬前代表から重いバトンを引き継ぎ、この4月から世話人代表を務めさせていただくことになりました加藤です。どうぞよろしくお願いいたします。

わたしが佐々木和之さんを初めて知ったのは、佐々木さんが国際飢餓対策機構のスタッフとしてエチオピアで農村自立支援に取り組んでおられる様子が、日本バプテスト連盟女性連合の機関誌『世の光』に掲載された時にさかのぼります。その後、2004年に佐々木さんがルワンダの REACH (Reconciliation Evangelism And Christian Healing for Rwanda) を通して現地で働きたいと日本バプテスト連盟の「国際ミッションボランティア」に応募された時に初めてわたしは佐々木さんと直接お会いしたのです。当時、日本バプテスト連盟の常務理事をしていた関係で、翌年の2005年4月、わたしは国外伝道主事の酒巻宏明さんと二人でルワンダに行き、REACH との契約に立ち会いました。その時に REACH のメンバーを前に佐々木さんが次のように語りかけた場面を今でも鮮やかに思い起こします。

「ルワンダ人と日本人のわたしとはお互いの間

に考え方や感じ方の点で多くの『違い』を抱えています。その『違い』が緊張を生むこともあるでしょう。しかし『違う者同士と一緒に働くこと』の意義はそれに優っています。お互いを尊重し、知恵を出し合い、祈りを合わせていく時、主が豊かに祝福してくださると確信しています。わたし自身が何かを提供するというよりも、すでにルワンダで主ご自身が働き人を起こされ、平和と和解の業を進めておられるのであって、わたしはそこで一緒に働かせていただきたいという思いでやって来ました」。

わたしは佐々木さんがその誠実な人柄からルワンダの人々に「KAZU!」と親しく呼びかけられ信頼されている様子を拝見しながら、彼がエチオピアや英国で学んだ経験すべてが、きっとこのルワンダで生かされていくであろうことを確信しました。事実、この11年間、ルワンダの人々が直面している現実がどれほど厳しいものであるかを知らされると同時に、ルワンダで生きて働いておられる復活のイエス・キリストが指し示す希望のメッセージを、佐々木さんとお連れ合いの恵さんご夫妻を通して豊かにいただけてきたことは、みなさまもよくご存知のことと思います。

つい先日、朝日新聞の誌面に「ルワンダ虐殺 癒

えぬ心 犠牲者 80 万人の悲劇から 22 年」という記事が掲載されました。その記事を読んだわたしが、「今回の記事は和解の困難さに焦点が当てられており、『この場所で生きてくためには…許すしかない』というトーンでしか語られておらず、残念です。」という感想をメールで送りますと、佐々木さんから次のような返信がありました。

「今回の記事は、取材された記者ご自身がルワンダの状況から希望を見出すことができなかつたことが、そのトーンとして現れているのだと思います。ルワンダの人々が置かれている状況が大変困難で、希望をそう簡単には見出しにくい状況であることは事実ですし、そう簡単には赦すことなどできないと思っておられる方が少なくないことも事実です。ただ、そのような状況の中で、赦しと和解への歩みを続けている方々がおられ、それは、記事に出てくる『私は彼らを赦そうと思う。…この集落以外に生きていく場所がないから』とコメントしたとされる女性もそのお一人なのだと思います。しかし、『この集落以外に生きていく場所がない』と『彼らを赦そうと思う』という二つの言葉の間にはとても深く、複雑な思いがあるはずですし、おそらく取材の中でもある程度は語られたことでしょう。『ここにしか生きていく場所がない』ということは現実としてあるとしても、そのことだけでは『赦そうと思う』という言葉は決して生まれることはないでしょう。希望は実はその行間にあるし、彼女が『赦そう』と決意し、それに向かって日々苦闘しているその歩みの中にあるのです。残念ながら、そういったことは、

新聞記者の方が数日で感じとることができるものではないでしょう。ぜひ今度は、草の根で和解の活動に取り組んでいる人々を取材してくださいとお願いしましたので、いつかそのような日が来るかもしれません。」

わたしは佐々木さんのこの返信を読んで、一人の方の言葉の「行間」にどれだけ複雑な思いがあり、日々の苦闘があるのか。その「行間」に思いをはせることのできなかつた、わたし自身の貧しい感性を撃たれる思いがしました。そして、ルワンダで今、生きておられる一人ひとり、その言葉の「行間」にある簡単に言葉にならない思いを聴き取り、受け止めながら、そこに一緒に希望を見いだしていく。そのためにこそ佐々木さんがルワンダに遣わされ、取り組まれているのだということを改めて深く示されたのでした。

考えてみますと、イエス・キリストはこの「行間」を生きてくださったインマヌエルの神です。イエス・キリストは一人ひとりが苦悩しながら生きている「行間」に、神の深い慈しみと希望を指し示し、共に生きてくださったのでした。

希望は、その「行間」にある！

佐々木さんの働きにつながることを通して、わたしたちも「この世界」と「この日本」における一人ひとりの闘いの「行間」に希望を見いだしていきたいのです。

「佐々木和之さんを支援する会」へのご理解とご協力をこれからもどうぞよろしくお願い致します。

「共に泣くために与えられた時」

ジェノサイド記念期間を過ごして

佐々木 和之
ささき かずゆき

ルワンダは4月7日にジェノサイドの22周年を迎えました。毎年4月7日からの1週間は、ジェノサイド記念期間の最初の週ということで、国中が独特な

重たい空気に覆われます。初日と最終日は政府主催の記念式典に参加し、間の5日間は午前中のみ仕事をし、午後は居住区ごとの学習会への参加が義務付けられ

ます。今年も、午後5時過ぎまでは交通機関の運行は完全にストップ、オフィスや商店も全て閉鎖、そして、昼夜共にスポーツや娯楽番組の放映もゼロという徹底ぶりでした。

私にとっては、12回目のジェノサイド記念期間でしたが、今回も様々な催しや活動に参加する中で、暴力紛争後の「癒しと和解」について、いろいろと感じ・考える貴重な時となりました。



<雨の中で行なわれた4月7日の記念集会>

■ ある記念式典での出来事

今年はこれまで4回ほどジェノサイド記念・犠牲者追悼式典に参加しました。先ほど書いた「独特の重苦しい雰囲気」について、少しでも感じ取っていただくために、4月に参加したある記念式典の様子お伝えします。

それは、「お花畑プロジェクト」を進めているニヤンザにある記念施設での式典でした。2年前に出来たばかりの建物の一階は、犠牲者の遺体・遺骨が入ったお棺を安置する部屋で、二階は犠牲者追悼のために献花をする場所になっています。その日は、その建物の前と左右に設置された特設テントの中に入り切れないうほど、6千人もの人々が集いました。

ルワンダ人歌手による追悼歌、虐殺生存被害者による証言、政府からの来賓によるスピーチが続いた後、虐殺生存被害者団体「イブカ」（「記憶せよ」の意）の地域代表によるスピーチが始まりました。50代と思われるその男性は、まず虐殺加害者の多くが生存被害者に謝罪をしていないことを非難しました。そして、民衆参加型裁判であるガチャチャが、虐殺加害者に課した賠償命令の多くが執行されていないことについて

触れ、「国軍兵士に依頼して、賠償金取り立てを徹底するべきだ」との持論を展開しました。この男性の言葉は、ジェノサイドから22年過ぎててもなお、十分な謝罪と賠償を受け取ることができていない多くの虐殺生存被害者の憤懣を代弁するものなのです。

するとその時、私の席の左の方から誰かが叫び声をあげたと思うと、会場にざわめきが起きました。目を向けると70代後半と思われる男性が立ち上がり、激昂して何かをまくしたてているのが見えました。その老人は「賠償を請求しようとしたら、自分は毒を盛られて殺されかけた」と叫び、加害者側への怒りをぶちまけていたのです。その周りでは、女性の悲鳴やむせび泣く声が上がリ、会場は一時騒然となりました。

イブカの代表は、そのような事態に動じるそぶりも見せずにスピーチを続けました。スピーチの最後には、ジェノサイド記念式典で登壇する人々が決まって強調する二点について語りました。第一は、加害者とその家族に対して、犠牲者が埋められている場所を明らかにするようにとの要請でした。その記念施設には、これまで2万3千以上の犠牲者の遺体・遺骨が集められていますが、未だに発見されていない犠牲者の数は9万人に上るということでした。

第二は、カガメ大統領率いる現政権与党であるルワンダ愛国戦線（Rwandan Patriotic Front、略称RPF）への感謝と賛辞でした。RPFがジェノサイドを止めて自分たちを救ってくれたこと、そして、生存被害者の福祉のために力を尽くすとともに、統合和解政策を押し進めて国民をまとめてくれていることを賞賛したのでした。

■ ジェノサイドを記憶する

私が今年参加したジェノサイド記念式典ではどれも、ルワンダ国民が記憶すべきこととして三つのことが強調されていました。まず第一は、ジェノサイドで殺された犠牲者を記憶することでした。「あなたたちを決して忘れない」とのメッセージが繰り返し発せられていました。第二は、ジェノサイドに責任を持つ者たちを記憶し、糾弾することでした。その中には、ジェノサイドを首謀した旧政権の指導層と実際に残虐

行為に加担したフツの人々、そして、旧政権を支援したりジェノサイドを黙認したいいわゆる国際社会も含まれていました。第三は、多大な犠牲を払ってジェノサイドを止めた RPF の兵士たちを記憶し賞賛することでした。ジェノサイドを記憶する行為は、優れて政治的な色彩を帯びたものなのです。

■ 「ツチに対するジェノサイド」

16年前に初めてルワンダを訪ねて以来、私はこれまでずっと、ジェノサイドがどのように記念されてきたのか、その中でも特に、誰がジェノサイドの被害者として認識されてきたのかについて注意を払ってきました。

ジェノサイドとは、「種」を表す古代ギリシャ語の *genos* と、「殺害」を意味するラテン語の *cide* からなる造語で、「集団殺害罪」と訳される国際法上の最重要犯罪です。その定義は、「国民的、民族的、人種的または宗教的な集団の全部または一部を集団それ自体として破壊する意図をもってなされる殺害や虐待等の行為とされています。

現在、ルワンダで起きたジェノサイドは、「ツチに対して行われたジェノサイド」と呼ぶことが徹底されています。この言葉には、1994年の大虐殺は、旧フツ政権がツチの殲滅を意図して実施したものであり、その被害者はツチであることが明示されているのです。事実、1994年の大虐殺で最も深刻な被害を受けたのがツチであることは間違いありません。全てのツチは、当時の政権に武装闘争を挑み、フツの体制を脅かす敵対勢力 RPF の支持集団であるというレッテルを貼られ、無差別殺戮の対象とされたのです。しかし同時に、RPF との対話路線を志向したために糾弾されたフツの政治家とその支持者ら、そして、ツチでなくても虐殺に抗う行動を取った人々の多くは攻撃・殺戮の対象となったのです。

RPF の最高司令官であったカガメ大統領率いる現政権は、ツチの被害者性を排他的に強調する傾向を一貫して強めてきており、それが、人々の癒しと和解のプロセスに大きな影を落としています。近年では、ジェノサイド・イデオロギー（他集団への差別や攻撃を是認する思想）として告発されることを恐れ、RPF

による戦争犯罪・人権侵害の被害者のことはおろか、旧政権によるジェノサイドで犠牲になったツチ以外の被害者について言及することすらタブー視する傾向が強まっています。2013年以降は、記念式典等の場で、「私たちは今日、ツチに対するジェノサイドで殺されたツチの人々を記憶するために集まっています」といった、ツチ以外の被害者の存在を否定するような表現を耳にすることも増えてきました。

私は、家族・親族の大半あるいはほとんどを失ったツチの人々の悲しみと苦しみを過小評価するつもりはありませんし、ジェノサイドと他の戦争犯罪・人権侵害を同一視するつもりもありません。しかし、過去の紛争においてツチの被害のみを強調し、それ以外の人々の被害を忘却することを強いる選別的な記憶政策は、ルワンダ社会に深く刻まれた亀裂を修復し、本当の癒しと和解を実現していく上で、乗り越えられなければならない課題であると強く感じています。そのような時代がいつ来るのかは分かりません。しかし、お互いの苦しみ・痛みをしっかりと受け止めた上で、「私たちは皆ルワンダ人だ」と心から言うことのできる新世代の出現に希望を持っています（前号1～2頁参照）。支援者の皆さまにおかれましては、ルワンダの平和と和解の働きが、この様に一筋縄ではいかない困難なものであることをご理解いただき、これからもお祈りくださりますようお願いいたします。

共に育て、共に献げた女性たち



<フラワーアレンジメント教室>

南部県ニャンザでジェノサイドの生存被害者である女性たちと加害者を家族に持つ女性たちが結成したグル

ープ、「ウムチョ・ニャンザ(ニャンザの光)」が進める「お花畑プロジェクト」(切花生産プロジェクト)。1月から花が咲きはじめてものの、思ったよりも生育が遅くて心配しましたが、何とか4月に間に合い、献花用の花束を準備することができました。

■ 女性グループの連帯

4月24日、ニャンザにある虐殺記念施設で行なわれた式典に参加しました。その施設のホールにおさめられている無数のお棺の中には、女性グループのメンバー7名の家族を含む2万3千もの犠牲者の遺骨が安置されています。4時間以上に及んだ式典の最後に、犠牲者への献花の時間がありました。女性たちは前日に集まり、3月のフラワーアレンジメント教室で学んだ技術を生かして花束と盛り花を準備しました。その花をまず7人の虐殺生存被害者の女性たちが一人一人、巨大な献花台の上に向けました。その女性たちを支えるかのように、他のメンバーが背後で横一列に並んでいたのが印象的でした。

失われた家族のために花を手向けた女性たちの表情は、深い哀しみを湛えていました。しかし、私には彼女たちがとても気高く、美しく見えました。献花を終え、私たちは輪になって手を繋ぎ、神に感謝の祈りを捧げました。

この女性たちがNGOリーチの「癒しと和解」のセミナーのために初めて集まったのは、今から2年前のことです。最初のセミナーでは、ジェノサイドで殺された家族を持つ女性たちと、加害者を家族に持つ女性たちの中には、お互いを思いやるといった様子は全く見られず、食事の時など明らかに二つの別のグループができていました。彼女たちがこうして犠牲者追悼の場に共にいることなど、想像すら困難なことだったのです。

私の教え子であり、今は同僚でもあるセルジ・ムブニくんがこれまで1年間、頻繁に彼女たちを訪ね、励ましてくることなくてして、この日が来ることはあり得ませんでした。セルジくんもジェノサイドで父親を失った虐殺生存被害者です。ジェノサイドで父親を殺された若者が、ピアスで平和構築学を学び、今、こうして女性たちの癒しと和解のために働くことなど、以

前は想像すらできなかったこと、まさに神の恵みの業に他なりません。



■ それぞれの女性たちの思い

ウムチョ・ニャンザの活動に積極的に参加している女性たちは現在21名ですが、そのうちの14名はジェノサイドの生存被害者、残りの7名はジェノサイドに加担したために服役中か、既に刑期を終えた夫を持つ女性たちです。

ペラジア・ムカンフンディさん(40歳)は、加害者の夫を持つツツの女性です。彼女がジェノサイドの記念集會に参加したのは、今回が初めてのことでした。「加害者の妻として責められるのではないかと正直怖かった。でも仲間と一緒に参加できて良かった」と語る彼女は、5人の子どもたちを抱え、経済的にも苦しい生活を強いられています。彼女の夫はグループの女性たちの家族には直接被害を与えていないものの、同じ村で他の家族の殺害に加わったということで長期の懲役刑を受け、現在も服役中です。彼女は同じグループのツツの女性たちと触れ合う中で、虐殺生存被害者が負っている悲しみ・痛みを少しずつ理解できるようになったと言います。そして、彼女の心の中で、自分の夫が殺害に関与した被害者の家族を訪問しなければ、との思いが芽生えたのでした。

彼女はこれまで夫が犯した罪のゆえに責めを負い、ひどく苦しんできました。しかし最近、「夫が犯した罪の犠牲者である必要はないんだ」と思えるようになったと言います。それは、共に働く生存被害者の女性たちが、彼女を「虐殺加害者の妻」としてではなく、一人の女性として接してくれるようになったからな

のでした。

5月にウムチョ・ニャンザのメンバーとピアスの学生たちがジェノサイドの記念施設を共に訪ねたとき、泣きながら殺された家族の名前を呼び上げる生存被害者のグラスさんに寄り添い、時には彼女の手を握っていたペラジアさんの姿を私は忘れることができません。



グラス・ムカルクンドさん(46歳)は、ジェノサイドでルワンダの大地が血に染まったころ24歳でした。両親は既に病気で亡くなっていましたが、弟、叔父、叔母、従妹を合わせ、25人の近親者を虐殺で失いました。彼女は、ニャンザでジェノサイドが続いていた1カ月間、同じ村のフツの男性に監禁され、性奴隷としての生活を強いられたのでした。彼女は、「仲間と一緒に参加してきた活動のおかげで、今年のジェノサイド記念期間は、以前よりも気丈夫でいることができた」と語っていました。込み上げてくる感情を抑えることができるようになったという彼女は、ペラジアさんに同情し、何らかの経済的な支援をしてあげたいと考えています。そればかりか、服役中の彼女の夫を仲間たちと一緒に訪ねてあげたいとも話しています。しかし、自分の心身を蹂躪し、今は終身刑で服役中のあの男性にだけはどうしても会う気にはなれません。実はその男性の妻にあたる女性が同じグループで活動しています。そのため、ペラジアさんだけ特別

扱いしてよいものかどうか迷っていたのでした。

女性グループの代表としていつも気丈に振舞っているエスペランセ・ムカンガンゴさん(51歳)は、夫、子どもたち、両親、兄弟姉妹は生き残ったものの、14名もの親類をジェノサイドで失いました。

彼女は女性グループと学生たちの交流会で、「ジェノサイドの記念期間は、神が与えてくださった共に泣くための時です」と言いました。そしてその後、同じ会場にいたペラジアさんの方を向き、このように語りかけたのでした。「あなたが、今年初めてジェノサイドの記念施設を訪ねることができたことを、私はとても嬉しく思っています。あなたは良い人です。あなたには誰の殺害にも責任がありません。あなたも様々な苦難の中をくぐり抜けて来られました。あなたに神の祝福が豊かにありますように」。そして、「主イエスの愛ゆえにこそ私たちはここに集い、助け合い、お互いを補い合うことができるのです。共に時間を過ごす中で、私たちは少しずつお互いを知り合い、信頼すること、そして助け合うことを学んできました」と語り、「私たちは共に、他の人たちのための光になりましょう」と呼びかけたのでした。

私はこのスピーチを聴き、エスペランセさんがキリストへの信仰によって支えられていることがよく分かりました。きっと彼女にも深い哀しみがあることでしょう。リーダーとして彼女はそれを人に見せないように努めているのかもしれませんが、今度じっくり彼女の話の話を聴いてみたいと思います。



佐々木さんを支援する会 前代表

(古賀バプテスト教会牧師)

金子 敬

かねこたかし

ご挨拶 ～世話人代表交代にあたって～

大国指導によるグローバリズムの流れに乗って急速に経済的格差が進む中、新たな軋轢が世界中に蔓延している混沌とした時代状況ですが、皆さま方におかれましても、心の痛みはいかばかりかと推察する次第です。個人的に「平和」を願わない人は一人もおられないと信じるものですが、しかし、そのベクトルがかみ合わず、新たな戦いの火種は、あちこちに満ちているように思われます。

1994年に中央アフリカのルワンダ共和国で起きたジェノサイドで100万人にもおよぶ人々が殺戮され、その後遺症で傷つく多くの人々の痛みを知った、当時、エチオピア内NGOで働いておられた佐々木和之さんは、ルワンダでの平和と和解への思いに心も体も動かされ、ルワンダに身を置くことを決断され、2000年秋にイギリスのブラッドフォード大学博士課程に進学され、ルワンダの平和構築に関するの学びで博士号を取得され、また、在学中より現地NGO組織REACH (Reconciliation Evangelism And Christian Healing for Rwanda)に加わって、今日まで、ルワンダの人々の平和と和解を構築する働きに身を投じて来られました。

佐々木さんは、日本バプテスト連盟国際ミッションボランティアとしてのポジションを得てのお働きですが、佐々木さんとそのご家族の生活の資はボランティアである性格上、日本バプテスト連盟から支給されません。そこで、佐々木さんを知る人々が彼の志に賛同する人々に呼びかけ、この活動を「草の根」的に広げていくために、「佐々木さんを支援する会」を結成いたしました。幸いこのことに多くの方々賛同して下さり、今日に至るまで、佐々木さんの働きを共有させていただきました。この会の運営のために発足した「佐々木さんを支援する会世

話人会」は、当初より、佐々木さんの活動を制約するものではなく、共に喜びをもって支えることをモットーとして今日まで佐々木さんの働きに伴わせていただきました。

結成当初には、佐々木さんも手探り状態でありまして、ジェノサイド後の両者の和解のプログラムをREACHの組織の中で展開され、虐殺加害者による虐殺生存被害者への償いの証しとして、その両者に寄り添いつつ、自らも泥まみれになって日干しレンガを作り、これを組み建てるという「家づくり」に力を注がれました。勿論様々な困難の連続ではありましたが、この働きが軌道に乗り始めると、更に、ルワンダとその周辺国の人々自身が「平和と和解の担い手」となるようにとの思いが起こされて、ルワンダにあるプロテスタント人文・社会科学大学(PIASS)内に「平和・紛争研究学科」を新設することに成功、いよいよその卒業生が平和構築のために歩み始めると言うところまでに至っております。

「家づくり」から始められたプロジェクトは「養豚プロジェクト」「お花畑プロジェクト」へと拡充され、その働きの姿は、会報「ウブムエ」誌にも随時掲載されている通りです。

世話人会は年に数回、ホテルロビーなど(場所代の不要なところ)を用いて開かれ、佐々木さんとそのご家族の健康状態などをはじめ、働きと安全を確認し、佐々木さんから出される多くの課題を協議、「支援する会」としての共有出来ることに関して予算執行を行って参りました。その働きの多くは、これまで事務局長を担って下さった吉高叶先生(現・日本バプテスト連盟常務理事)や、現在担って下さっている播磨聡先生(広島キリスト教会牧師)をはじめ、世話人会メンバーの方々、そして、佐々木さ

んを送り出して下さっている洋光台キリスト教会（蛭川明男牧師）の皆様のご奉仕に負うところが大了。

そして、この働きを今まで継続できたのは、キリスト教会の枠組みを超え、日本ばかりでなく世界のあちこちからも「支援者」となって佐々木さんのお働きに協働して下さった皆様方のご協力・ご支援の賜物によります。この交わりの輪こそが、平和と和

解構築そのものであったと回想するものです。10年以上の長きに亘り、この交わりの中に置かせて頂き、働きの一端を担わせていただきましたことを心から感謝し、皆様に改めて御礼申し上げます。

今般、世話人代表を加藤誠先生（大井バプテスト教会牧師）にバトンタッチいたしました。今後とも、これまでに倍するご支援の程をお願い申し上げます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

事務局からのお知らせ

- 4月より代表が交替いたしました。新代表は加藤誠さん（大井バプテスト教会牧師）です。前代表金子敬さん（古賀バプテスト教会牧師）のお導きに感謝いたします。
- 佐々木和之さんは、6月8～30日に一時帰国し、報告会を行います。また、11月も一時帰国を予定しています。報告会等を希望される方は、事務局長の播磨（携帯 090-6150-0268）までご相談ください。
- 第二回ルワンダ和解の現場訪問ツアー（9月5-14日）を10名の参加者で実施することになりました。

帰国報告集会 2016（上期）のご案内

■ 報告集会 in 大阪 2016年6月12日（日） 15:00-

会場：日本バプテスト大阪教会 大阪市天王寺区茶臼山町1-17 電話 06-6771-3865 牧師 下川俊也

■ 報告集会 in 上尾 2016年6月19日（日） 10:30-特別礼拝 14:00-報告会

会場：日本バプテスト上尾キリスト教会 埼玉県上尾市小泉36-66 電話 048-726-2208 牧師 秋山信夫

昨年始めたニヤンザでの女性グループによる協働プロジェクトには、年間100万円の資金が必要です。一年前に皆様にご協力をお願いしましたところ、新入会者のご紹介と共に指定寄付（2016年2月現在約60万円）をいただきました。心より感謝いたします。このプロジェクトはあと二年続きます。どうぞ、続けてのご協力を、お願いいたします。

- 事務簡素化のため、「振替用紙」を同封しています。請求ではありませんが、必要な方はご利用下さい。

● 郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会 ●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 加藤 誠（大井教会牧師）、中條智子（三島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、村上千代（東京北教会協力牧師）、播磨 聡（広島教会牧師）